

ド産の標本 (E. Bethel, 1897) に基いて, Underwood が 1901 年に記し, 後に *Battarraea*, *Battareopsis*, *Dictyocephalos*, *Phellorina*, *Whetstonia* などの諸属のものとして記載された各種が異名として整理され, ただ 1 種 *D. attenuatus* Long et Plunkett が認められた。その分布区域はかなり広く, 北アメリカ(コロラド, ネバダ, ミネソタ, ニューメキシコ, カリフォルニア)とアフリカ(エジプト, 南モロッコ, 南ローデシア)の乾燥地帯の砂質または酸性土壌のところに孤生し, または 2~5 個体が群生すると云われている。最近ソ連邦のウラル地方で, オカヒジキの類と混生していることが Vasslikov によつて報告され, 更に分布区域を拡張した。

コーボーフデは, 生態的にも大陸産のものに異り, 立派な固有種と考えられるが, ソ連邦の Vassilikov は, 従来 *D. nitentatus* の中に含められていた *Phellorina strobilina* Kalchbr. を別種と認め, *D. strubilinus* Vassilik. の新組合を作つたので, それが正しいとすれば, コーボーフデ属は 3 種類からなり, 南北両半球, 新旧両大陸に産することになった。

〇ベニツヤゴケについて (水島うらら*) Urara MIZUSHIMA: On the status of *Entodon rubrissimus* Sakurai

信州八ヶ岳に採集を行つた際に野辺山の湿原に於いて一蘚を得, 桜井博士が本誌 28 卷 59 頁に *Entodon rubrissimus* Sakurai ベニツヤゴケなる新種を記載せられた。桜井博士によれば, 本種は *E. ramulosus* Mitt. に似るが多少小形で茎葉が卵状披針漸尖で美麗なる紅色を呈するのが異点である。其の折に御供した筆者は同博士採集の蘚座から分与せられた Iso-type に相当する標本 (Herb. U. Mizushima. no. 9477) を所持しているが, 之を *E. ramulosus* Mitt. の多くの標本と比較し, 葉の紅色を呈する点以外は両者の差を見出し得なかつた。即ち外観上 *E. ramulosus* に比して小形であるという点は確かに発育良好な *E. ramulosus* の個体に比べれば言えることではあるが, *E. ramulosus* は種々な環境の下に生じ, 生育地の状態によつて全形の大小に相当の変化を示す。又 *Entodon* 属の各種類の如く密に着生基物を覆つて成育し, 古い部分が次第に朽ちて行くようなものではその正確な全長というものを掴み難い。岩上や樹幹下部に這い上つて居るようなものでは古い部分が比較的に残つて居るが, *E. rubrissimus* の如く, 湿原という特殊な立地にあるものでは若い部分を除いては早期に朽ちて了うのは当然の事であろう。そこで一年内に成長したと思われる若い部分の長さを比較すると, *E. rubrissimus* では全体として 3.5~4 cm で *E. ramulosus* の大体同時節に採集された蘚座の特に中心部附近のものは 3~4 cm のことが多く, *E. rubrissimus* と変りがない。ただ多くの *E. ramulosus* では枝の巾は葉と共に 2 mm 程度であるが *E. rubrissimus* では原記載

* 東京都府中市

にある如く 1.5 mm で着き方もまばらである。然しこれとても *E. ramulosus* の変化範囲に含まれる事で、筆者が武蔵、西多摩郡、松原村の杉林下で採集した *E. ramulosus* (no. 8268) では葉と共に巾 1 mm 内外の細い枝を有する。茎葉の形に関しては *E. ramulosus* の原記載を見ると *Folia.....ovato-lanceolata caviuscula.....integerrima* となっており、*E. rubrissimus* は *Folia caulina e basi constricta, ovato-lanceolata, sensim attenuata, concaviuscula, minute holodonta* で歯の有無以外に殆どかわりがない。葉基と葉先が細くなっている点異なるようではあるが、葉基がくびれる傾向は *E. ramulosus* にもあり、葉先の形も多くの生育良好な *E. ramulosus* に比べれば確かに細長くなっているが、茎の基の葉では広く短く、若い部分ほど細長くなる傾向がある。本品は先にも述べた如く湿原のもので、古い部分は褪変して完全な葉を残さず、茎葉として観察する部分はどうしても茎の若い部分になる。注意して成る可く古い部分の葉を観察すれば *E. ramulosus* の如く広く短いものが見出される。又 *E. ramulosus* の中でも貧營養地に生育して細い枝を生ずるようなものは茎葉も鋭尖頭になつて来る傾向がある。葉縁は原記載に *minute holodonta* とあるが、筆者の檢したところでは古い茎葉では全縁であり、若いものになると縁辺細胞が弧を画いて多少凹凸を示すものや半以上で微鋸歯を有するものが現れて来る。一方 *E. ramulosus* でも古い茎葉では全縁であるが、若いもの殊に貧營養地のものでは縁辺細胞の上端が多少突出して微鋸歯状を呈する傾向がある。以上を以て見れば Mitten が記載した葉は生育良好な個体の而も充分成長した茎葉であろうし、桜井博士のものは貧營養地の個体の而も若い茎葉に相当する形質を示している。結局葉の形態にも両者に差を見出し難い。最後に色調の問題であるが、*E. ramulosus* は陰湿地では緑色を呈するのを普通とし、やや日光照射の強い所では枝の葉は紅色を帯びる。此のことから推して、野辺山の本品は海拔約 1500 m の乾いた泥炭地に生じ日光照射は充分であり、それ故に紅染の度が強く現れたものと思われる。

以上の事から筆者は *E. rubrissimus* は *E. ramulosus* の単なる生態形と見るのを至当と考え、名の扱いとしては強く紅色を帯びた一極端品として品種の級位に置くのが良いと思う。

Examining the range of variation of *Entodon ramulosus* Mitt., *E. rubrissimus* Sakurai, which is based upon the specimen collected in a dried peat-bog at about 1500 m above sea level on Mt. Yatsugatake, should properly be regarded as an extreme form, in red tint, of the former species. Hence I propose here to reduce Sakurai's species as below:

Entodon ramulosus Mitten

forma **rubrissimus** (Sakurai) U. Mizushima, stat. nov. *E. rubrissimus* Sakurai in Journ. Jap. Bot. 28: 59, f. 5 (1953)